

婚姻無効になったので新しい人生始めます

イザベラ

サイラスの母で、セレーナの義母。
会う度に跡継ぎの
プレッシャーをかけてくる。

シェイン

アレス国の第三王子で、
類稀なる剣の才を持つ。
口下手だが、大切な人に対しては
非常に優しく、
どんな困難からも守ろうとする。
真面目で誠実な性格。

ハインツ

ドルマン国の王太子。
サイラスの幼馴染。

サイラス

カリスト侯爵家の当主。
セレーナと政略結婚したものの、
白い結婚のまま三年経った。

セレーナ

物語の主人公。
カリスト侯爵と結婚するも相手にされず、
使用人からも軽んじられる
不遇な生活を送る。
だが、前世の記憶を思い出し、
現状から抜け出すことにして――？

Character

第一章 この結婚、なかったことにしよう

夫婦の寝室にある大きなベッド。その端に座り、今日も旦那様が来るのを待ち続けている。しかしこの部屋に旦那様がやって来たことは、初夜以外一度もない。それでも私は待ち続ける。

私の居場所はこちらにしかないのだから。

◇ ◇ ◇

「くしゅん」

気づけば夜も深くなり、薄い夜着しか着ていない私は身体をぶるりと震わせた。

ベッドの中で待とうかとも考えたが、もし旦那様が来たら失礼だろうと思い、座ったまま待つことを選んだ。

けれど今の季節、夜は冷える。結局寒さに耐えきれなかった私は、少しでも身体を温めようと、自分で自分を抱きしめた。

しかしそんな私の努力を嘲笑うかのように、時間だけが無情に過ぎていく。そしてとうとう日付が変わってしまった。

もしかしたら今日こそは来てくれるかもしれないと、心のどこかで期待していたのだが、最後までこの部屋の扉が開くことはなかった。

「……三年」

静かな部屋の中に、ポツリと言葉が零れ落ちた。

今日、いや正確に言えば昨日になるが、昨日は旦那様と結婚してちょうど三年という節目の日だった。

三年とはそう短くはない時間だろう。それなのにいまだ私の身体は清らかなまま。

旦那様に相手にされていないことを知らない義母からは、会う度に跡継ぎを催促され、事情を知る屋敷の使用人たちからは、屋敷の女主人として認めてもらえず、蔑ろにされ続けていた。

そんな私にできるのは与えられた仕事をきちんとこなし、夜はこうして一人寂しく旦那様を待つことだけ。

これからも同じ日々が、ずっと続いていくのだろうか。

そんな考えが、ふと頭を過った。

(これからどうすれば……っ！)

急に言いような不安に駆られた私は、とてもじっとしてはいられず、座っていたベッドから急いで立ち上がろうとした。

「きゃっ！」

急いだのが良くなかったのだろう。立ち上がろうとしたが、寒さで冷え切った手がシーツの上を滑る。

そしてそのままバランスを崩し、倒れた拍子にベッドの脇にあったミニテーブルに頭をぶつけてしまった。

「い、痛っ……」

あまりの痛さに、急いでぶつけたところに手を当てて確認したが、どうやら血は出ていないようだ。

後でたんこぶくらいはできるだろうが、それくらいで済んでひとまず安心した。

「……そろそろ起きないと」

部屋に誰もいないとはいえ、いつまでも床に倒れ込んだままにいるわけにはいかない。

私はなんとか身体を起こし、立ち上がろうとした次の瞬間……

「痛っ!!」

先ほどテーブルにぶつけた時より、遥かに強い痛みが私を襲った。

まるで鈍器で頭を殴られたような痛みに、その場から動くことができず、ただうずくまることしかできない。

(何、これ……。頭が、割れそう！ い、痛っ……っ)

必死に痛みに耐えていると、突如として頭の中に何かが流れ込んできた。

(これは……………私、の記憶?)

空まで伸びる建物に、馬車ではない地面を走る大きな箱、それに手のひらでピカピカ光る薄い物体……

どうして頭の中に流れ込んでくる何かが、自分の記憶だと思ったのか。

(見たこともないはずのものばかりなのに、懐かしく感じるのはどうして……?)

一体これは何なのか。

心の底から知りたいと願う私がたしかに存在しているというのに、痛みでこれ以上は何も考えられそうにない。

私は床にうずくまったまま、訳も分からず、ひたすら痛みに耐え続けるしかなかった。

あれからどれくらい時間が経ったのだろうか。

外はまだ暗いので、もう朝だということはないだろう。ようやく痛みが治まり、これなら起きられそうだとゆつくりと床から身体を起こし、立ち上がる。

そしてベッドの上に仰向けに寝転ぶと、わずかな灯りに照らされた天井を見つめた。

「私、転生したんだ……」

痛みが治まった途端、私は理解した。

あの痛みは、私の前世の記憶が流れ込んできたものだ。

初めての経験ではあるが、間違いないと思う。



どうやら私は前の世界で人生を終えた後、この世界で生まれ変わったようだ。たしか前世の世界では、異世界ものの小説がずいぶんと流行^はっていた記憶がある。当の私も何度もそういった小説を読んでいたのも、今の状況はなんとなくだが理解している。

私が好んで読んでいたのは、異世界転生した悪役令嬢が主人公の小説だ。

バッドエンドを回避するために奮闘したり、持っている知識を駆使し巨大な陰謀に立ち向かったり、婚約者を奪ったヒロインにざまあをしたりと……

様々な物語を読んできたが、その中で転生した主人公が前世の記憶を思い出すと、現世での記憶を失^なくしてしまうという設定をよく見てきた。

読んでいた時は、今までの記憶がなくなってしまうばかりが大変だなあと、他人事^{ひとごと}のような感想を抱いていただけだったが、実際に自分が当事者となってしまうたら、そんなのんきなことは言っていられない。

今の私はこれまでの記憶をちゃんと覚えているのだろうか。覚えていなかったらと思うと不安になるが、きちんと現状を把握するのは重要なこと。

そう自分に言い聞かせ、私はベッドに寝ころんだまま目を瞑^{つぶ}った。

「えっと……、今の私の名前はセレーナ・カリスト。三年前にカリスト侯爵と結婚した。……うん。ちゃんと覚えてる」

血の繋が^{つな}った家族、辛かった学生時代、そして突然の婚約に、拒絶されたあの夜のこと……

どうやら小説と違って、私は転生しても現世の記憶をしっかりと覚えているようだ。

安心した。これならすぐにでも行動に移すことができる。

だけど今は深夜。できることならこのままベッドで眠^ねってしまいたいと身体が訴えているが、今はそれどころではないと自身に活を入れる。

「こういう時は最初が肝心よね。……そう、最初が！」

前世の記憶を思い出したことで今の私は、性格というか内面的なものがかなり前世の私寄りになっている。だからなのだろうか、先ほど現世の記憶を確認した際に気づいてしまったのだ。

現世^{いま}の私を取り巻くこの状況が、あり得ないということだ。

前世の記憶を思い出す前の私は、自分の居場所がなくなってしまうかもしれないという不安から、不遇な日々を受け入れていたようだが、今の私には到底受け入れられるものではない。

(旦那様には全く相手にされず、義母からはプレッシャーをかけられ、使用人からは見下され……。

それでもと、与えられた仕事をこなし、毎晩来るはずのない旦那様を待ち続ける日々……。ああ、

何て私は健気^{けんげ}な)

「……つてこんなのやつてられるかつ！ あり得ないでしょ!? どうにかしてこの現状から抜け出さない……あつ！」

何かいい案がないかと記憶を引っ張り出していると、今の私にぴったりの方法を思い出した。

これならこの理不尽な状況を打破することができるはずだ。その方法というのは……

「……うん、この結婚はなかったことにしよう」

この世界には、結婚したという事実すらなかったことのできる方法が存在する。

貴族同士の結婚は家同士の契約だ。本来は簡単に離婚することはできないのだが、何事にも例外がある。

一つは結婚して三年が経っても子どもができない場合。

もう一つは白い結婚が三年続いた場合だ。

前者は離婚扱いとなるので結婚した事実はなくならない。ただ後者であれば婚姻を無効とすることが出来る。

どちらの場合も三年が経っていることを証明できれば、相手の同意なく一人で手続きを行うことができる。とされている。

前世の記憶を思い出す前の私が、年数を気にしていたのはこのため。

結局白い結婚のまま三年経ってしまったが、今回ばかりはいつも通り旦那様が夫婦の寝室に現れなかったのは好都合だ。

（婚姻を無効にされて居場所がなくなることを怯^{おび}えるくらいなら、こっちから無効にしてやればいい）

どうせ三年も抱かなかつたのだ。そんな妻など不要だろう。もしかしたらあちらもそれを望んでいたのかもしれない。

それならその望みを叶えてあげようじゃないか。

今の私には、こんな居場所なんていらぬ。

さあ、そうと決まれば、あとは行動あるのみだ。

「思い立ったが吉日っていうものね！　こんな屋敷からはさっさと出て行くに限るわ！」

そうと決まれば早速屋敷から出ていく準備に取りかかる。善は急げ、だ。

私は夫婦の寝室を出て、急いで自分の作業部屋へと向かった。

作業部屋というのは、女主人の部屋を与えられなかった代わりに私に与えられた唯一の部屋だ。屋敷の端にあるその部屋は、日当たりが悪く、昼間でも薄暗い。私はそんな場所で三年もの間、働かされていたのだ。

暗い廊下を歩いていく。もう夜も遅いからだろう。誰ともすれ違うことなく、気づけば目的の部屋の前。扉を開き、部屋の中へと身体を滑り込ませる。

そして静かに扉を閉めたところで、私は大きく息をついた。

「ふう……」

誰かに見つかったらどうしようかと緊張したが、無事にたどり着くことができた。机の上に置いてあったランプに手を伸ばし、火を点ける。すると真つ暗だった部屋が、ほんのり明るくなった。

この部屋は屋敷の端にあるので、明かりがついていても誰も気づかないだろう。たとえ気づいた人間がいたとしても、どうせあの女がまだ部屋で何かしているだけだと、気にも留めないはず。

私は一通り部屋の中を見回した後、急ぎ準備に取り掛かった。

まずは備え付けられているクローゼットを開け、薄い夜着から質素なワンピースに着替える。これでようやく寒くなくなった。

次は荷造りだ。数少ない私物と、この部屋にある使えそうなものを、どんどん鞆^{かばん}に詰め込んで

いく。

この鞆かまきは以前の私が作ったものだ。多くの魔力と時間をかけて作ったこの鞆かまきは、たくさんの物を入れることができる。

「これも、これも……あ、これも持っていかなくちゃ。……うん、こんなものね」

一通り荷物を詰め終わったので、次の準備に取り掛かろうと、仕事用に与えられていた素材の中から、数種類を取り出して机の上に並べた。

作業とは言ってもたいしたものではない。これまで何百、何千、何万と同じことを繰り返してきた私にとっては手慣れたものだ。

素材を均等に切つて、水の入った小さな鍋に一緒に入れる。そして鍋を火にかけ、魔力を注ぎながら混ぜ続けていく。

「よく混ぜて、よく混ぜて……よし、できた！ 早速これを飲んでつと……」

出来上がったばかりの液体をグイッと飲み干す。するとすぐに私の身体に変化が起こった。

髪はくすんだ金色から茶色に、瞳も淡い水色から茶色へと変化したのだ。

「やっぱり染めるより魔法薬まほうぐすりの方が簡単ね」

魔法薬とはこの世界にある薬の一種で、さまざまな種類が存在する。

今私が飲んだのは、髪と瞳の色を変えるための魔法薬。飲むだけでたちまち色が変わるので、前世でお世話になっていた髪染めもカラーコンタクトも必要ないのだ。

私は鏡で変化した自身の姿を確認する。そして長い髪を一つにまとめ、ローブを羽織れば準備完了だ。

了だ。

「……さてと。まずは街の教会で白い結婚の証明をしないとね」

部屋に置いてある時計に視線を向けると、まだ日の出までには時間がある。今から街に向かえば、朝一には教会にたどり着けるはずだ。

私がここを出て行ったとしても、使用人たちは普段から私をいないものとして扱っているのですぐには気づかないだろう。

きっと私がいなくなったことに気がついて慌てている頃には、すでに私と旦那様の婚姻は無効になっているに違いない。

むしろそれくらいで気づけばいい方だと思う。もしかしたらもっと長い間気づかない可能性もあるかもしれないが、それならそれで都合だ。気づかれなければそれだけ時間を稼ぐことができるのだから。

これで最後の仕上げだ。私は机の引き出しから便箋びんせんと封筒を取り出し、真っ白な紙の上に筆を滑らせていく。

「……うん、これくらいかな」

書き始めてから十分ほど経っただろうか。急ぎ書き終えた私は、目の前にある便箋びんせんの枚数を見て驚いた。簡潔に書くこうと思っていたはずなのに、気づけばずいぶん長くなってしまったようだ。

「……まあ、いいよね？」

これは旦那様への手紙だ。

最後に文句の一つでも残してやろうと思ったが、当然一つで足りるはずもなかった。想像より多くなった便箋に自分でも苦笑いしてしまったが、書いてしまったものは仕方がない。

手紙に封をし、魔力を込める。これでこの手紙は旦那様しか開けることができない。私は机の上に手紙を置いた。

「これで終わりっ」と

出て行く準備は全部終わりだ。

忘れたものはないかと部屋を見回した後、鞆を抱え、ひょいっと部屋の窓から外へと出た。

誰かに見られればはしらないと言われるだろうが、そんなの今の私には関係ない。

窓から出たその足で正門へと向かう。門には見張りの兵士が立っていたが、後ろからそつと魔力で気絶させると、そのまま正門から堂々と出て行った。

二度とこの屋敷にも、この国にも戻るつもりはない。

これからは私らしく、自分の生きたいように生きていく。

誰かに与えてもらうのを待つのではなく、自分の居場所は自分で作ってみせる。

だって昨日までの私はもういないのだから。

「それでは、さようなら」

別れの言葉を一言だけ告げる。

そして星が輝く空の下、まだ暗い道に明るい未来があることを信じ、私は新たな人生の一步を踏み出したのだった。



魔法で光を灯し、暗い道をひたすら歩き続ける。

つい数時間前、頭をぶつけたことで前世の記憶を思い出した私は、休む間もなくすぐに屋敷を出てきた。そのため色々と落ち着いて考える時間がなかったが、今のこの時間はちょうどいいだろう。どうせまだまだ歩かなければならない。それならばこの時間で、今の状況を整理してみようと思う。

私の名前はセレーナ・カリスト。

アルレイ伯爵家の娘として生を受けた私は、今から三年前、カリスト侯爵家に嫁いだ。

お相手の名前はサイラス・カリスト。

カリスト侯爵家の嫡男だったが、結婚と同時に父親から爵位を譲り受けたことで、若くして侯爵家の当主となった。

私と旦那様の結婚は、この国ではめずらしくもない政略結婚だ。魔力のアルレイ伯爵家と財力のカリスト侯爵家。

この世界には魔力が存在している。誰しもが多かれ少なかれ魔力を持って生まれてくるのだが、少ない人がほとんどで、魔力を多く持つ人は稀だ。

魔力が多い人は、髪や瞳の色が淡い色味をしているという特徴があると言われるが、かく言う私も金の髪に水色の瞳と、その特徴に合致している。

ちなみに金の髪と一言で言っても色々あるが、私の髪は金髪の中でも淡いプラチナブロンドだ。くすんだ金髪だったのはわざと髪を染めていたから。

前世の記憶を思い出す前の私は両親から、妹より目立つなと言われていたので、幼い頃からずっと髪を染めさせられていた。

（その割に、この色に産んでやったのだから感謝してと言いつづけていたけどね）

今は何とも思わないが、幼い頃、その言葉はまるで私にはそれだけしか価値がないと言われていたようで、言われる度（たび）に悲しい気持ちになっていたものだ。

結婚してからも両親からの命令で髪を染め続けていた。

だから元夫は、私の本当の髪色を知らない。

本来の私はプラチナブロンドの髪に瞳は淡い水色と、とても目立つ色をしているのだ。

ただ魔力があっても魔法を使えるわけではない。

炎や氷で直接攻撃したり、傷を治すなど異世界ものの物語で定番の魔法という概念は、この世界には存在しない。

では魔力はどのように使うのかというと、武器や肉体に纏（まと）わせて強化したり、魔道具の動力にしたり、魔力を注いで薬を作ったり……つまり自分の意思次第で色んなことに使えるのだ。

アルレイ伯爵家は魔力を多く持つ者がよく生まれる家系だが、それ以外に誇れるものはなにもな

く、常に金に困っていた。

一方でカリスト侯爵家はすでにたくさん事業を起こしていたが、さらに新たな事業を始めたいと、魔力を多く持つ人材を探していた。

そんな利害が一致した両家は、私と旦那様との婚姻を結ぶことに決めた。

豊富な魔力を持つ娘を嫁に出すことでアルレイ伯爵家は資金援助を受け、カリスト侯爵家はすぐに使える人材と、嫡男（ちやくなん）と結婚させることで魔力を多く持つ家系の血筋を手に入れたのだ。

アルレイ伯爵家には私と二つ下の妹がいたが、嫁に出されたのは長女である私だった。

カリスト侯爵家は魔力の多い方を嫁に求めている。だからより魔力の多い私が嫁に出されたと言えはその通りなのだが、実際の理由はちよつと違う。

娘が二人いるにもかかわらず、私が選ばれた理由。

それはいたってシンプルで、私が家族から疎（うと）まれていた存在だったからだ。

いくら格上の侯爵家が求めたからと言っても、本来なら家の繁栄のため、より魔力の多い私が伯爵家を継ぐべきである。

しかしそれを両親が嫌がった。

どうやら私は父の母親に顔立ちが似ているらしい。父も母も祖母のことを嫌っていたようで、似た顔立ちをしていた私は生まれて程なくして、両親から疎（うと）まれる存在になってしまったのだ。

さらにそんな私に追い打ちをかけるように、二年後に生まれた妹は母にそっくりな顔立ちだった。当然両親は妹だけを可愛がり、私に目を向けることは一度もなかった。

同じ親から生まれた姉妹なのに、そんな両親の姿を見て育った妹は、「姉という存在は邪険にしている存在なのだ」と思うようになってしまったのである。

そんな決して恵まれているとは言えない環境でも、何とか成長していった私は十二歳になり、学園に入学することになった。

両親は金がかかるからと、私を通わせられなかったようだが、この国の貴族子女は十二歳になると通学することを法で義務付けられている。そのためかなり渋々ではあったが、なんとか通うことができた。

ただ両親に疎まれて育った私は、これまでまともな教育を一度も受けさせてもらえなかったため、何も分からないまま入学することになったのだ。

入学当初はペンの正しい持ち方すら分からない状態だったが、幸運なことに私には一度覚えたら忘れない才能があったようで、学んだことはなんでもすぐに覚えることができた。

それに今までの反動だろう。学びたいという欲求はとどまることを知らず、気づけば私は学年で一番を取るまでになっていたのだ。

まあ、今思えばこれは前世の記憶のおかげだと思う。おそらく私は無意識に、潜在的に眠っていた前世の記憶を思い出していたのかもしれない。

家では相変わらずであったが、友人もそれなりにできて、学園では楽しい日々を送っていた。だけれど楽しい時間というのはあつという間に終わってしまうもの。私の楽しい学園生活は、たったの二年で終わることになる。

なぜなら妹が学園に入学してきたからだ。

妹は覚えも悪い上、勉強が嫌いだ。これまでも気に入らないからと、何人もの家庭教師をクビにして、最終的に妹の家庭教師を引き受ける人は誰もいなくなった。

それに両親は妹が望めばなんでも叶えてあげてきたため、妹は努力も嫌いだ。

よって妹の成績が悪くなかったのは、当然の結果と言えるだろう。はつきり言って下から数えた方が早かった。

学年一位の私と、最下位に近い妹。

もしも普通の家庭であれば、私は一位を取ったことを誇りだと褒められ、妹はもつと努力しろと叱られたはず。

だがそれはあくまでもしもの話であつて、現実とは全く違う。

両親から疎まれていて私が褒められることなどあり得ないし、逆に妹に恥をかかせたとひどく叱られた。

もちろん妹も、姉が自分よりいい成績であるなど受け入れられるわけもなく。

『お姉様ごときが私よりもいい成績だなんて何かの間違いよ。こんなの認められないわ！』

そう両親に訴えたため、なんと私は妹よりいい成績を取ることを禁じられてしまった。

どう考えても普通ではないが、それはおかしいと両親に反論することなど当時の私にできるはずもない。ただ黙って受け入れるしか選択肢はなかったのだ。

それから卒業するまで、つらい学園生活を送ることになった。

何が一番つらかったかと言うと、本当は理解しているのに分からないふりをしなければならなかったこと。

テストだけ手を抜くようなことをすれば、教師に怪しまれてしまう。だから学年が上がったと同時に、授業についていけなくなったふりをした。

突然様子のおかしくなった私に教師たちは眉を顰め、友人たちは私の側から離れていった。

そしてついに私は学園でも独りぼっちになってしまったのだ。

一時期はもう学園に行きたくない、行っただけで何の意味もないと思っていた。

だけど私の中にある、学びたいという欲求がなくなることはなく、その欲求を満たすため、休み時間や放課後を図書室で過ごすようになった。

妹は本を全く読まないの、図書室に足を踏み入れることはなく、そのおかげで私が図書室にいたことは家族にバレずに済んだ。

図書室にはたくさんの知識が溢れていて、私はその知識を貪るように頭の中に蓄えていった。

そういえば図書室で思い出したことがある。図書室で過ごしていた私は、よく誰かに見られていたのだが、あれは一体誰だったのだろうか。

図書室を利用する生徒はあまり多くない。

だからもし本当に見られていたのであれば、相手が誰なのかすぐに分かりそうなものだが、結局最後まで分からないまま……

ふとそんな出来事を思い出したが、もう学園を卒業してから三年が経っている。

今さら答えを知る術などないことに気づいた私は、気にしても無駄だと思い直し、改めて記憶の整理を始めた。

一人読書に没頭する学園生活を送っていたが、最終学年になるとすぐに旦那様との婚約が決まる。当然私の意思など確認されるわけもなく、卒業と同時に結婚式を挙げるとだけ伝えられた。

婚約期間は一年にも満たなかったが、その間旦那様と顔を合わせることも、手紙や贈り物をもらうことも終ぞなかった。

おそらく旦那様にとって私との婚約は、相当不意なものだったに違いない。

けれど私たちの婚約は家同士の契約だ。たとえば侯爵家の嫡男である旦那様でもどうすることもできず、仕方なかったのだろう。

気持ちは分からなくてもいい。

それでも少しくらいは、婚約者に対して誠意を見せてくれてよかったのではと思わずにはいられなかった。

私にとっても旦那様との婚約は突然降って湧いた話だったが、私からは手紙も送ったし、お金がなく手作りになってしまったが、誕生日には贈り物だった。

なぜならそれが礼儀であると学園で学んだから。

ただどこちらがいくら礼儀を守ろうとも、旦那様からは手紙の返事もお礼の言葉一つすらもなかった。

今の私ならふざけるなど文句を言っているところだろう。

けれどこの頃の私は旦那様に抱いていた希望を捨てることができず、結婚さえすれば家でも学園でも居場所のなかった私も、ようやく報われるのではと期待してしまったのだ。

結局旦那様に初めて会えたのは結婚式当日。バージンロードを歩いた先にタキシード姿の旦那様が立っていた。

黒い髪に黒い瞳の端正な顔に、長身で細身だけど決して弱々しいわけではなく、さぞかし女性にモテる、そんな容姿をしていた。

それに引き換え私は、くすんだ金髪に女性としては高めの身長。さらには女性らしさに乏しい体型と、非常に残念な容姿をしている。唯一の取り柄は淡い水色の瞳くらいだろうか。

前世の私も身長が高く凹凸の少ない体型だった。だから小柄で出るところは出ている、メリハリボディの可愛らしい女子に憧れたものだ。

結婚式は滞りなく終了し、馬車に乗って侯爵家の屋敷へと向かった。

馬車の中でも旦那様との会話は一切ない。こちらから話しかけようと迷ったが、そうしているうちに侯爵家に着いてしまう。

せめて馬車を降りる時に一言お礼でもと思ったけれど、旦那様から手を差し出されることはなく、そのまま屋敷の入り口で別れることになってしまった。

その後すぐに浴室へ移動し、着衣を脱いだ後、使用人たちに全身を磨かれ、香油を塗りたくられる。

そして仕上げにと透けた夜着を着せられ、夫婦の寝室で待つように指示をされた。

私はその指示に従い、旦那様が来るのを待った。

ずいぶんと遅かったので何かあったのではと心配したものの、ようやく旦那様が部屋へとやってきた。

この後の初夜を思っただけ緊張していたが、私はなんとか笑顔で旦那様を迎え入れた。

だけど旦那様はそんな私の姿を一目見た後、顔を横に向け一言こう言ったのだ。

『今は君を抱くことはできない』と。

この時の私の絶望は計り知れない。

つまり私は旦那様にも、不要だと言われたのだ。

旦那様は私にその言葉を伝えると、さっさと部屋から出て行った。夫婦の寝室には私だけが残され、そのまま一人で朝を迎えることになった。

傷つかなかったと言えは嘘になる。

何がいけなかったのか、もしかして嫌われてしまったのだろうか、考えても考えても、答えが出るはずもなく……

それでも私は希望を捨てることはできなかったのだ。

あの時旦那様は、『今は』と言った。それならいつかは私を必要としてくれる日が来るかもしれない。

だから私は旦那様から唯一与えられた仕事を懸命にこなし、その日が来るのを待ち続けた。

そうして気がつけばいつの間にか三年が経ち、十七歳で結婚した私は現在二十歳になっていた。

「……はあ。こうやって思い返してみると、なかなか不遇な人生を送ってきたわね……」

家族や夫に疎まれながらも、必死に耐え続け、いつか報われると信じていた以前の私。

けれどこうして前世の記憶を思い出した今なら、その努力が報われる日が来ることはないとかる。

だから無駄なことに時間も労力も割くつもりはないし、誰かの顔色を窺いながら生きていくつもりもない。

これまでの私は自分の居場所を失わないために、人の顔色を窺って生きてきた。だけど今の私にはそんな人生なんてとても受け入れられない。

「他人に振り回される人生なんて絶対に嫌！ せっかく転生したんだから、自由に楽しく生きていきたい！ 運のいいことに私には魔力がたくさんあるし、前世の記憶だつてある。まあお金はないけど……」

今現在、私の懐はとても寒い。

あれだけ働いてもまともに給料をもらえないとは、とんだブラック企業に就職してしまったものだ。高そうな花瓶の一つくらい持つてくればよかった。

「……今さら悔やんでも仕方ないか。とりあえずお金さえあればこの世界でも何とか生きていける

とは思うのよね。なんとかしてお金を稼がなくちゃいけないけど、何かいいお仕事ないかなあ？ できれば学園で学んだことが活かせるところで働けたらいいんだけど……」

何だかんだと考えながら歩いていたら、いつの間にか空が明るくなつてきていた。この調子なら太陽が顔を出す頃には、目的の街にたどり着くはずだ。

「きつともうすぐだわ。街に着いたら教会に行かなくちゃね。それさえ終われば……そうね、隣の国にでも行ってみようかな」

隣の国の名前はアレス国。

アレス国はここ、ドルマン国の隣にある国だ。

この二つの国は同じ言語を使い、礼儀作法も大した違いはない。

けれど国の在り方だけは大きく異なっていた。

ドルマン国は基本男性社会で、出世できるのは貴族でも男性だけ。それに対してアレス国は実力さえあれば性別も身分も関係なく、平等に出世することができる。

前世で社会人として働いていた私にとって、生きるために働くのは当たり前のこと。だからつい先日まで一応貴族ではあったとしても、働くことに対しては何の抵抗もない。

でも今の私は何の力も持っていない、ただの平民女性だ。

ドルマン国は平民の女性が一人で生きていくには難しい。そもそもいい思い出などない場所で、このまま住み続けたいとは思えない。

それならば国を出て、新しい場所で新しい人生を始めたい。

アレス国を目指そう。

今後の行動を決めた私は、ひとまず街を目指し歩き続ける。そしてこの世界が眩い光に照らされ始めた頃、無事に街へとたどり着いたのだった。

たどり着いたこの街は、カリスト侯爵領の中で一番大きな街だ。

まだ朝早いにもかかわらず、街にはすでに活気が溢れている。パンを焼くいい匂いが鼻腔をくすぐり、子どもの楽しそうな笑い声があちらこちらから聞こえてくる。

私はそんな中を教会へと向かうべく歩いていった。途中、街の人に道を尋ねながら進んでいくと、無事に教会にたどり着いた。

中へ入ると、朝早くから祈りを捧げている街の人の姿がちらほらと見受けられる。

教会の中には年配の司祭と若い司祭がいたが、私は年配の司祭の方に声をかけることにした。

「あの、すみません」

「はい。いかがされましたか？」

「白い結婚の証明をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「！……ええ、もちろんです。こちらへどうぞ」

年配の司祭が驚いた表情を見せたのは一瞬のことだけで、その後はすぐに表情を戻し、丁寧に対応してくれた。

（やっぱりこっちにして正解ね）

私が年配の司祭を選んだ理由はこうだ。

そもそも白い結婚の証明を申し出るのは貴族くらいだろう。平民同士であれば、離婚届を提出するだけで婚姻関係を終わらせることができる。

けれど貴族同士の離婚は、どうしても家の利益や跡継ぎの問題が出てきてしまう。

例えば夫婦の間に子どもがいなかった場合、その責任がどちらにあるのかを判断する必要がある。

その時に間違いなく夫婦関係があつたかどうかを確認するために、白い結婚の証明が用いられるのだ。

過去には想いを寄せる女性と結婚したいがために、妻とは自らの意思で一切関係を持たず、三年が経つとすぐに白い結婚を証明して、婚姻を無効にする人もいたらしい。私の場合はこれと似たようなものだろう。

白い結婚の証明の申し出は、そのほとんどが男性からであり、女性からはまずいない。なぜなら夫婦関係があつたのかを疑われ、確認されること自体が貴族の女性にとってはとてつもなく屈辱的なことからである。

たとえば白い結婚ではなかったとしても、証明が行われたという事実が誰かに知られるくらいなら、女性側は辛い結婚生活に一生耐え続けるか、証明をしない代わりに男性側が提示する理不尽な条件を受け入れて離婚するか、どちらかしか選択肢がない。

そういった理由から、まだ経験の少なそうな若い司祭ではなく、様々な経験を積んできたであろう年配の司祭にお願いする方がいいと判断したので。

（まあ、私は他人にどう思われようがそんなこと気にしないけど。でもいちいち驚かれるのはなんか嫌だし、ベテランにお願した方が早く手続きが終わりそうだしね）

前世の記憶がある私からすれば、離婚も婚姻無効もできるのなら喜んで証明を受けるだろう。というより、今まさに現在進行形で受けようとしている。

別室に案内されると、その部屋には椅子が一つ置かれていた。

「こちらにお座りください」

年配の司祭に座るように指示され、私は一つだけ置かれた椅子に腰かけた。年配の司祭は私と向き合う形で膝をつく。

「それでは手をお借りします」

そう言つて年配の司祭が私の手を握ると、次の瞬間私の身体の中に何かが流れ込んでくるのが分かった。

「っ！」

本で読んだことがあったので知識としては知っていたが、経験するのは初めてなので驚いてしまった。

こうして神の祝福を得た司祭が自身の魔力を流すことにより、身体の状態を確認することができののだ。時間にしてみれば一分ほどと短いものだったが、身体中を異物が動き回るような感じがしてとても不快だった。

でも白い結婚であることを証明するにはこれしか方法がない。

「……終わりました」

「ありがとうございます」

「ご気分はいかがですか？」

「大丈夫です。お気遣いありがとうございます」

「それならよかったです。ではこれであなたの身が清らかであることが神の祝福により証明されました。……この後はいかがされますか？」

さすがベテランだ。私が何を求めているのかちゃんと理解している。私は迷わず答えた。

「白い結婚による婚姻無効をお願いしたいのだけど」

「承知しました。それでは手続きをさせていただくにあたり、お名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろん。私の名前はセレーナ・カリストよ」

「っ！ ……すぐに手続きいたしますので少しお待ちください」

「よろしくね」

おそらく私が貴族だということは気づいていただろう。だけどそれがまさかこの領地を治めている、カリスト侯爵の妻だとは予想もしていなかったに違いない。

それでも驚いたのはまた一瞬だけで、その後は粛々と手続きを進めてくれた。

神はこの世界で至上の存在だ。そんな神の祝福によって白い結婚が証明された今、たとえ一国の王であろうともこの結果を覆すことはできない。

結婚して三年が経った翌日。私はセレーナ・カリストからただのセレーナになったのだった。

年配の司祭に心ばかりの寄付を手渡し、私は教会を後にした。

手続きの際、アルレイ伯爵家に籍を戻すこともできるがどうするかと聞かれたが、そうはしなかった。あんな家の名前を名乗るくらいなら、平民になる方がマシだ。

今の私には前世の記憶もあるし、今までも令嬢でありながら身の回りのことはすべて自分でこなしてきた。だから平民になったとしても何の問題もない。

これから目指すアレス国でなら平民であろうとも、実力さえ認められれば一人で生きていくことだってできるはず。

私には前世の記憶のほかに、豊富な魔力と学園で蓄えた多くの知識だってある。

それにカリスト侯爵家では、新事業である魔法薬事業に従事させられていた。

魔法薬の開発から調査までをたった一人で三年もこなしてきたので、それなりの実力があると思っている。そこに前世の記憶が加われば、十分にやっていけるのではないだろうか。

教会を出た私は、これからの旅に必要な物を街で買い、寄り道など一切せず、すぐに乗り合い馬車に乗って国境を目指した。

カリスト侯爵領は国の中心である王都に近い場所にあるので、国境にたどり着くまでにはかなりの時間がかかる。

一睡もせず歩き続けたので、できることなら休憩したい。だけど国を出るまでに時間がかなりす

ぎれば、カリスト侯爵家から差し向けられた追手に捕まる可能性もある。せっかく自由になれたのに、あの家に連れ戻されるなど御免だ。

だから急いで馬車に乗り込んだが、落ち着いたところでやつぱり追手は来ないだろうと思いついた。どうやら私は自分で思っているよりもだいぶ疲れているようだ。

屋敷の人間は私がいなくても早くて一日、遅ければ三日は気づかないだろう。たとえ気づいたとしても、領地にある屋敷から元旦那様のいる王城には馬車で三、四時間はかかる。

しかも王城には事前に手続きをしなければ入ることができないため、連絡を入れるのにさらに一日はかかるはず。

そうなれば追手を差し向けようにも、私を捕まえることは容易ではなくなる。

……いや、三年もの間全く相手にしなかった私がいなくなったとしても、元旦那様は不要なものを片付ける手間が省けたと喜ぶだけで、わざわざ私を捕まえようとは思わないのではないか。

それならあの街で少し休憩してもよかったのではと一瞬後悔しそうになったが、それは違っていると頭を横に振った。

（ううん、私はこの国から一刻も早く出ていきたい。だから急ぐのに越したことはないわ）

とりあえず今すぐ追手は来ないと思う。だけど念のため、しばらくは髪と瞳の色は変えたままだよ。そして目立つような行動はせず、万が一に備えて私がいいた痕跡はなるべく残さないようにしなければ。

それからは何日もかけて馬車を乗り継ぎ、国境を目指していく。

時間のある間に少しでもお金を稼ぐべく、行く先々で魔法薬を作っては、その街や村にある冒険者ギルドで売ることにした。

魔法薬を作るための道具はあの部屋から全部持ってきていたし、材料は持ってきたものと、この道中で採取したものであるのでそれなりの量を確保できている。

これなら問題なく魔法薬を作ることができるだろう。

昼は馬車に揺られ、夜は宿屋で魔法薬を作り、朝の出発前に冒険者ギルドで作った魔法薬を売る。そんな毎日を繰り返していくと、それなりの金額を稼ぐことができた。

(まさか魔法薬があんなに高値で売れるなんてね)

たしかにこの三年間、私は魔法薬を作り続けていたが、その魔法薬がいくらで取引されているのかは全く知らなかった。

魔法薬が高価だということは知っていたが、私が想像していた価格よりもさらに高値だったのだ。もちろん作った分を全部売ってしまえばもともと稼ぐことができる。

しかし、同じ場所で大量に売るのは避けるべきだ。突然高価な魔法薬を大量に持ち込めば怪しまれ、私の居場所がバレるリスクが高くなる。

今ここで金稼ぎに夢中になるのは危険だ。本来の目的を忘れてはいけない。

念には念を入れて国を出るまでは気を緩めるべきではないのだ。

残った魔法薬は空間魔法がかけられている鞆かまもに入れているので劣化する心配はないし、国境を越えてから売ればいい。

どうせ新しい生活を始めるにはお金が必要になる。だから高値で売れる魔法薬はいくらあっても困ることはないだろう。私はそつと鞆かまもを閉じた。

そうして最初の街から馬車を乗り継ぐこと三週間。ようやく国境へとたどり着いた。

果たしてこの国境を越えた先にはどんな世界が待っているのだろうか。考えただけでもワクワクする。

「よし、行こう！」

ここからが新しい人生の始まりだ。

私は希望を胸に、大きな一步を踏み出したのだった。



「セレーナがいなくなっただと……？」

ここは王城にある私——サイラス・カリストにあてがわれた部屋。ここ数年はこの部屋で寝泊まりしている。

そこにやってきた顔色の悪い家令かれい。月に二度報告に来る以外は一度も来ることはなかったのに、突然どうしたのかと思っていたのだが、まさかの話に呆然とするしかなかった。

家令かれいから告げられたのは、私の最愛の妻であるセレーナが、屋敷からいなくなってしまったとい

うとても信じられない話だったのだ。

「どうして……」

私の口から零れ出たその言葉に、明確な答えは何一つ返ってくることはなかった。

妻であるセレーナと結婚したのは今から三年前。

この結婚の表向きの理由は、お互いの家に利益をもたらすための政略結婚だ。

我が家には多くの魔力を持つ人材を。アルレイ伯爵家には金を。そのための結婚であるとあちらの家には伝えていたが、実際は違う。

この結婚の本当の理由。それは、セレーナに一目惚れした私の強い希望によるものなのだ。

セレーナに一目惚れをしたのは私が十六歳の時。

学園の図書室で見た、真剣に本を読む彼女の横顔が頭から離れなくなったのだ。

セレーナは私の二つ歳下の十四歳。

年齢よりも大人っぽい見た目ながら、まるで欲しかったおもちゃを買ってもらえた子どものような好奇心に満ち溢れた表情に惹かれた。

それからというもの、何をしていても彼女の姿が忘れられず、一目見ようと入学してからほとんど行くことのなかった図書室に何度も通った。

そんな私の様子を側で見ていた友人からは、話しかければいいのにと呆れられていたが、私はか

なりの口下手だ。話しかけたところで何を話せばいいか分からないし、もし嫌がられたとしたら立ち直れない。

そもそもこの歳まで女性を好きになることがなかった私は、この初めての感情をどうすればいいのか分からなかったのだ。

結局私はセレーナに一度も話しかけることができないまま、学園を卒業してしまった。

卒業した後は、父の手伝いと友人である王太子の側近として忙しく過ごしていたが、それでもセレーナのことが頭から離れることはなかった。

彼女に会いたい。彼女と話したい。彼女と共に生きていきたい。

会えない時間が長くなれば長くなるほど、セレーナへの想いが募っていく。

けれど私は侯爵家の嫡男だ。いつまでも婚約者がいないままというわけにはいかない。

これまでも何度か縁談はあったが、その度に断ってきた。

しかし私もそろそろ結婚しなくてはならない年齢になり、いい加減見かねた父からの命令でたくさん令嬢との縁談を用意されてしまった。

命令だから仕方ないと何人もの令嬢と会ったが、どうしても彼女と比べてしまう。

これでは相手の令嬢に失礼だ。

そう思った私は、セレーナへの想いを思い切って両親に打ち明けることにした。

両親に自分の想いを打ち明けてから数日後。父に呼ばれ執務室へ行くと、そこでセレーナとの婚

約が決まったことを教えられた。

当然私は喜んだ。ずっと忘れられずに想っていた彼女と結婚することができる。これ以上嬉しいことはない。

私はしばらくの間、そんな夢のような話に浮かれきっていた。だからなのだろうか。そんな私へ忠告するかのように、ふとした瞬間に言い知れぬ不安に襲われるようになったのだ。

セレーナはこの婚約を、私のことをどう思っているのか。

(もしかしたら喜んでいるのは私だけで、彼女はこの婚約を望んでいないのではないか……)

一度そう思ってしまうと、急にすべてが怖くなった。

婚約者としての義務を果たそうと思っても、手紙は何を書けばいいのか全然思いつかないし、セレーナの好きなものなんて分からない。結局一度も贈り物をする事ができなかった。

これではダメだと頭では分かっている。

それなのに彼女に嫌われたらと考えると、身体が動かなくなってしまうのだ。セレーナからは手紙も贈り物も届いたというのに……

情けないことに彼女と一度も交流できないまま、結婚式当日を迎えてしまった。

これ以上失態を繰り返すわけにはいかない。今日こそはと自身に気合いを入れ、結婚式に臨んだ。ウエディングドレス姿のセレーナはとても美しかった。

最後に見た頃より大人びた彼女の、あまりの美しさに見惚れてしまい、そうして気づけば結婚式は終わってしまった。

結婚式の後、共に馬車に乗り屋敷に帰ってきたはずなのに、緊張で乗った時以外のことは覚えていない。

いつの間にか屋敷に着いていて、初夜を迎える直前になっていた。

急いで準備を整え、セレーナが待つ部屋の前に立つ。この扉の先に彼女がいる。

(これで本当の夫婦になれる……!)

そう思いながら扉に手を伸ばそうとしたところで、私はまた不安に襲われた。

今から彼女を抱く。果たしてうまくできるのか、彼女に嫌がられないか……そんなことをぐるぐると考えていると呼吸が上手くできなくなり、その場で蹲ってしまった。

(こんな状態ではとても初夜を迎えられない)

自分があまりにも情けないことは分かっている。分かっているが、どうしてもセレーナを前にすると緊張してしまうのだ。

できるならこんな情けない姿は見られたくはない。

だけどさすがに何も言わぬままというわけにはいかない。せめて自信が持てるまで少し待つてほしいと伝えなければ。

私はそう決意し、扉を開けた。

灯りが一つしかない部屋は、窓から月の明かりが差し込んでいるため思ったよりは暗くなかった。

そして部屋の奥にあるベッドに視線を向けると、そこにはセレーナがいた。彼女はベッドの端に座り私が来るのを待っていたようだ。

私に気づいた彼女がベッドから立ち上がる。すると窓から差し込んでいた月明かりが彼女を照らし、ウエディングドレス姿とはまた違った美しさを放っていた。

さらに身に纏う夜着があまりにも煽情的で……

(うっ！)

心臓が激しく脈打ち、今までに経験したことのない痛みを胸を押さえた。

このままではまずい。

そう本能的に悟った私は、急いで彼女から視線を逸らす。そして一刻も早くここを離れるべく、口を開いた。

『今は君を抱くことはできない』

それだけ口にしてすぐに部屋から出て行つたが、あの時彼女はどんな表情をしていたのだろうか。思い出せない。

しかしそれは当然だ。見ていないものを思い出すことは不可能なのだから。

あの夜からもう三年が経つたが、私はいまだにセレーナを抱くことができていない。

仕事忙しいことを言い訳にして、セレーナと会話すらしてこなかった。

(どうにかしなければいけないのは分かっている)

ただ彼女の前で情けない姿を晒して嫌われるのが怖くて、三年が経つた今も行動に移すことができずにいた。

もちろんセレーナのこととは今でも心から愛している。彼女以外の女性と添い遂げるなど考えられない。

ただその想いすら一度も彼女に伝えられていない。

貴族社会では初夜を済ませない限り、書類上は妻であつたとしても正式な女主人として認められない、という暗黙のルールがあることは当然知っていた。

けれど私たちの場合、悪いのは私であつて彼女には何の非もない。

私は家令にだけは事情を話し、屋敷の者たちにセレーナをこの侯爵家の女主人としてよく尽くすようにと伝えた。

さらに家令には何かあればすぐに報告するようにと言いつけ、彼女がいつでも好きなものを買えるようにと、侯爵夫人用に多くの予算も割いた。

たとえ初夜を済ませていなくても、当主である私がこまですれば、誰も彼女を軽んじることはない。そう思っていた。

実際に家令からの報告でも、今まで何も問題はなかった。だからセレーナは今の生活に対して何も不満などないはず。

(それなのになぜ彼女は屋敷から出ていってしまったのか)

どれだけ考えても、私には理由がさっぱり分からない。

それでもこのままじっとしているわけにはいかないことだけは分かる。

私は仕事を放り、誰にも告げることもなく城を飛び出すと、馬を走らせ、急ぎ領地にある屋敷へと向かった。

領地は王城のある王都から近い場所にあるので、馬で走れば二時間ほどで屋敷にたどり着く。

いつもは馬ではなく馬車で移動しているが、馬車だと倍近く時間がかかってしまう。今はその時間が惜しかった。

今までも週に一度だけは、セレーナの待つ屋敷に帰るようにしていた。

最後に帰ったのは三日前のこと。ただその日も緊張してしまい、彼女と顔を合わせることはできなかった。

そういう時は、今回は仕方なかった、次こそはと自分に言い聞かせていたが、セレーナがいなくなったと聞いた途端、私は後悔に押し潰されそうになっていた。

(彼女に会いたい。彼女と話したい)

そうして屋敷に着いた私は、突然の帰還に驚く使用人たちを無視し、急いで彼女の部屋へと向かった。

そこで見た光景に啞然とした。

「……なんだこれは」

部屋の中には元々備え付けられている机や本棚以外、何一つ置かれていない。それにクローゼツ

トを開けてみても、中は空^{から}で、使われた形跡すら見当たらなかった。

「何もない……？」

彼女の部屋はこの部屋で合っているはず。母も以前この部屋を使っていた。それなのに書類の一枚すらないなんて、これはあり得ることなのだろうか。

何かがおかしい。そう思った私は、城から一緒に戻ってきた家令^{かれい}を問いただした。

「これは一体どういうことだ？」

「こ、これはっ！ その……」

「はつきり言え！」

「その、お、奥様の部屋は、別の場所に……」

「……別の場所だと？ お前は何を言っているんだ。ここが彼女の部屋だろう？」

「それが……」

家令^{かれい}は何かを知っているようだが、なかなか口を開こうとしない。どうやら私に知られるとまずいことがあるらしい。

しかし今はその時間すら惜しいのだ。私はグツと手を握り、その手を壁に叩きつけた。

——ドン！

「ひっ！ サ、サイラス様……？」

「どうやらお前は私に報告していないことがあるようだな」

「っ！ それは……」

「言い訳はいい！ 今すぐにその場所に案内しろ！」

「は、はいっ！」

そして顔色の悪い家令に案内されたのは、この屋敷の中で一番日当たりの悪い部屋だった。

この部屋は昼間ですら日が入らないため薄暗く、ジメジメしているので誰も使っていなかったはずだ。

そんな部屋の前に立った私は、嫌な予感がして扉を開けるのを躊躇^{ためら}つてしまう。何か取り返しのつかない何かが起きているのでは……

(……いや、ダメだ)

たとえ嫌な予感がしようともこのままではいけない。

私は一つ大きく息を吸った後、一気に扉を開けた。

まず、目の前に広がる光景に驚いた。そこはとても女主人が使うとは思えないような物で溢^{あふ}れ返っていたのだ。

それに薬のような独特な臭いが充満している。

「うっ……！ なんだ、この部屋は……」

「こ、こちらが奥様の普段過ごしていた部屋です……」

部屋には何かの実験道具や見慣れぬ植物の実や葉、それに何の書類だろうか、たくさんの数式が書かれている。

一枚手に取ってみたが、何が書かれているのか全く分からない。

(ここがセレーナの部屋だと？ 何かの間違いじゃ……ん？ 机の上に何かが……)

ふと机の上に視線を向けると、ポツンと置かれている白い封筒に気がついた。

ただの封筒のはずなのに、なぜだか異様に目を惹かれる。

私はおもむろに封筒に手を伸ばす。するとその封筒には美しい文字で私の名前が記されていた。「っ！」

この美しい文字に見覚えがある。

(これは……セレーナからの手紙……?)

とてつもなくて嫌な予感がする。読みたくないと思っているが、彼女からの手紙を読まないわけにはいかない。

私は震える手で封を開けると、恐る恐る手紙を読み始めた。

サイラス・カリスト様

この手紙を読まれているということは、私が屋敷から出て行ったことに気がついたのですね。

果たして今は、私が出て行ってから何日経っているでしょうか。

この手紙は特定の人物にしか開けられないように魔力を込めておいたので、もしかしたら読まない可能性もあるかと思いますが、こうして無事に読んでもらえたようで何よりです。

まあ本音を言えば、読まれなくてもかまわないと思っていましたがね。

……さて、今回屋敷から出て行くにあたり、私からあなたに言いたいことがありましたのでこうして手紙を書くことにしました。

お忙しいとは思いますが、せっかくですのうのでどうか最後まで読んでくださいね。

私がこの家に嫁いできてから、もう三年が経ちました。

月日が流れるのは本当にあつという間ですね。

私たちの結婚は政略によるものでしたが、侯爵夫人になれるなんてと、周りの人間からすれば私はとても幸運な者に見えたことでしょう。

他人からすればそうなのかもしれません。

ですが私は違いました。

ここで過ごした三年は私にとって、とても辛いものでした。

では始めに、私のここでの一日を知ってもらいたいと思います。もしご存じでしたら飛ばしてもらっても構いませんよ。

まず私の一日は誰に起こされることもなく、日が昇り始める前に一人で起きるところから始まります。

普通であれば使用人が起こしに来てからゆっくりと起き、用意されたお湯で顔を洗い、彼らの手によって服や髪といった身支度を整えるものなのでしょう。

ですが私のものには誰も来ないのですべて一人で行っていました。

まあ一人で身支度するのは昔からしていたことなので慣れていましたが、まさか侯爵家の使用人がそんな幼稚なことをするとは思っていませんでしたね。

朝食は毎日固いパンと冷めた野菜屑のスープがご丁寧^{ちやうほう}に厨房に置いてあるので、それを自分で取り行って食べていました。

朝食を食べ終わり食器を片付けた後は、この作業部屋でひたすら魔法薬の研究と生産に勤^{いそ}めます。

もちろん休憩などありません。なぜなら休憩をする暇もないほどの数の魔法薬を作るように指示されていたからです。

昼食もなければ、お茶が運ばれてくることなんて絶対にありません。

もうやめたいと何度思ったことでしょう。

それでも魔法薬を作ること、この屋敷で自分に与えられた唯一の仕事だからと必死に励んできました。

毎日魔力がなくなるギリギリまで作業をして、一日のノルマが終わる頃には日は完全に沈んでいきます。

月明かりに照らされた廊下を魔力が尽きそうな重く^{けだる}気怠い身体を引きずって、誰もいない厨房^{ちやうぼう}で夕食を食べる。

ちなみに夕食は朝食と同じか、パンだけの時もありましたね。

嫁いってからこの屋敷で柔らかなパンや温かい料理を食べたのは、片手で数えられるほどしかありません。

ません。

それは何かの気まぐれだったのか、あなたが私を夕食に誘ってくれた時だけでした。

夜も遅いためお風呂に入る時間もなく、タオルを冷たい水で濡らし身体を拭くだけの毎日。

そして一日の最後に疲れた身体に鞭打^{むち}って、毎晩夫婦の寝室であなたが来るのを待ち続け、そしてまた一人で目覚める。

これが私の一日です。

いかがですか？

とても侯爵夫人が過ごすような日常ではないことを、ほんの少しでも理解してもらえたでしょうか。

ここまで読むと、使用人が本来すべき仕事を放棄していることが悪いように思うでしょう。しかしそれは違います。

たしかに使用人の私に対する態度は褒められるものではありません。仕える家の品格を下げる行動は慎むべきです。

使用人たちをきちんと指導された方がよろしいのでは？

……話を戻しますね。

侯爵夫人である私が、あのような使用人以下の生活を送らなくてはならなかった原因。それが使用人たちでなければ、一体何が原因だと思いますか？

それは旦那様、あなたです。

あなたに悪意があったのか、なかったのかは私には分かりません。

ですが、あなたの私への態度が原因であることには違いありません。

私はあなたのせいで辛い三年間を過ごすことになりました。

覚えていますか？ あなたは結婚式の夜にこう仰^{おしや}いましたよね。

『今は君を抱くことはできない』と。

その言葉に私がどれだけ苦しんだことか。あなたには分からないでしょう。

あの夜から三年が経った今も私の身体が清らかなままだということは、屋敷の人間であれば誰でも知っています。

知っているということ、それはつまり私は誰からもカリスト侯爵家の女主人として認められていないということを意味します。

貴族社会には初夜を済まさない限り、その家の人間として認められないというルールがありますよね。

だから使用人たちはあなたから相手にされない女など、この侯爵家には不要だと考えたのでしよう。

その気持ちは私も理解できます。

仕えている主にとって不要な人間などできることなら追い出したい。

ですが彼らは私を追い出すことはできなかった。

なぜなら私を追い出してしまえば、侯爵家が進める魔法薬事業が進まなくなってしまうから。だから彼らは私を追い出すことも、害することもできなかった。

できたのは、私をいない者として扱うことくらい。

もどかしい思いだったでしょう。

まあ結局私はいなくなりましたので、彼らの願いは叶いました。

今思い返してみれば質素ながらも朝食と夕食が必ず用意されていたのは、私を飢えさせないため、魔力がなくなるまで毎日魔法薬を作り続けさせていたのは、私が逃げ出さないようにするため、といった意味があったのかもしれないね。

まともに睡眠がとれない中、『これがあなたの唯一の仕事だ』『侯爵様が強く望んでいる』そう言われ続けることで、そうするべきであると思い込んでしまっていました。

一体誰の思惑だったのでしょうか？

あの時の私は自分の居場所を守るために、言われたことを受け入れるのが当たり前になっていたのです。

そういえばお義母様は私たちが白い結婚であるということをご存じないようですね。

たまにお義母様がこの屋敷にいられていましたが、会う度にニコニコと笑顔で、『早く孫が欲しいわ』と仰っていました。

初夜すらもまだだにご存じであれば、そんな顔をして言えるわけありませんものね。

ですが私の口から言えるはずもなく、お義母様からの期待はとてつもないプレッシャーとなって私にのしかかってきました。

もしもこのままの状態が続いたら……

そう思うとお義母様に会うことも、お義母様の笑顔を見ることがも怖くなりました。

このままではお義母様から私はいらないと言われてしまうのではないか。

でもそんなことを気づかれるわけにはいきません。

なんとか笑顔を作って誤魔化していましたが、さらに気力も体力も削られ、とても大変でした。

でもただ一つだけ。

お義母様がいらっしゃった時は、めったに飲むことのできない温かいお茶と甘いお菓子を食べることができるのはよかったですね。

……ずいぶん長くたってしまいました。

そろそろ手紙の冒頭に返ることにしましょう。

私たちは先日で結婚してから四年目を迎えましたね。

三年経ったその日も私はいつも通り夫婦の寝室で待ち続けていましたが、あなたが来ることはありませんでした。

私は寒さで震える身体を擦りながら、いつまでこんな生活が続くのだろうかという不安に押しつ